

# 乳幼児における公平感の発達：眼球運動による検討

(中間報告)

玉川大学脳科学研究所 高岸 治 人  
北海道大学大学院教育学院 日本学術振興会 小泉 径 子  
玉川大学大学院脳情報研究科 藤井 貴 之

## Development of a sense of fairness in infants

Tamagawa University Brain Science Institute, TAKAGISHI, Haruto  
Hokkaido University, Japan Society for Promotion Science, KOIZUMI, Michiko  
Graduate School of Brain Sciences, Tamagawa University, FUJII, Takayuki

### 要 約

公平感は、人間の利他行動の進化に重要な役割を果たしていることが、近年の研究で明らかになってきた。公平感を調べた発達研究によれば、公平感は生後間もない乳幼児においても見られる事が明らかになってきた。本研究では、公平感に基づいた規範逸脱者への罰傾向が、乳幼児においても見られるかどうかを明らかにする実験を行った。

**【キー・ワード】** 乳幼児, 公平感, 罰

### Abstract

Recent studies showed that a sense of fairness plays an important role in evolution of human altruism. According to recent developmental study, even infants have a sense of fairness. The purpose of this study is to examine punishment tendency to norm violator based on fairness in infants.

**【Key words】** infants, fairness, punishment

### はじめに

遺伝的に関係のない他者に対する利他行動は、人間社会において顕著に見られる。しかし、人々が何故、このような自己犠牲的な行動を自ら行うのかという問いは、人間を生物学的、進化論的な観点から眺めると大きな謎の一つである (Fehr, & Fischbacher, 2003)。近年、人類学者、経済学者を中心とし、人々が持つ公平感が利他行動の進化に重要な働きを持っているという議論が展開されている (Gintis et al., 2003)。彼らの議論の中心は、人々は社会規範 (e.g., 平等分配規範) を破る者に対し

て罰を与える傾向を持ち、そのような罰行為が利己的な行為のインセンティブを低下させる働きを持つという点にある。つまり、人々は社会規範が破られるような状況に直面すると、それに対して不公平だと感じ、その者を罰しようと強く動機づけられるということである。本研究では、このような心理傾向が何歳頃に芽生えるのかを乳幼児の眼球運動を測定することで明らかにすることを目的とした。

乳幼児の眼球運動を測定することで、乳幼児の公平感を調べた先行研究はすでにあるが (Sloane et al., 2012), Sloane らの研究では、乳幼児が資源分配状況において、不公平な分配に対して特異的な反応を示すことを明らかにしたのみであった。近年、公平感に関する研究が様々な学問分野で行われ注目を集めているが、その理由は、公平感が規範逸脱者への罰を引き起こす重要な原動力となると考えられてきたからである。つまり、重要な点は、乳幼児が不公平な分配に対して示す反応と、規範逸脱者へ罰を与えた際に示す反応がリンクしているかどうかであると考えられる。規範逸脱行為を目撃した乳幼児が、その者に対して罰を与えたいと思うか、そしてその傾向が不公平分配に対する反応とどのように関係するのかを明らかにした研究は、現在のところ皆無である。

## 方 法

**対象者** 玉川赤ちゃんラボに登録している 1 歳半から 2 歳までの乳幼児約 20 名を調査対象とする。対象者の年齢は先攻研究に準じて選別した。

**選好注視法** 本研究では選好注視法を用いて、乳幼児の公平感、罰傾向を明らかにする。選好注視法とは、乳幼児が持つ新規な状況を長く見るという傾向を利用した研究法のことである。先攻研究で示した Sloane ら (2012) の実験ではこの方法を用い、不公平分配と公平分配という 2 つの状況を乳幼児に呈示し、注視時間を比較した。仮に、乳幼児が公平感を備えているのであれば、不公平な分配のような乳幼児が持つ予測と反する状況が生じた場合に、公平分配よりも長く注視するだろうというわけである。

**課題** 参加者となる乳幼児には、以下で説明するいくつかの状況に関する動画を見てもらい、注視時間を測定する。

状況 1 : A さんと B さんのお皿に上に、お菓子を公平に分けた場合と不公平に分けた場合の映像。

状況 2 : お菓子を不公平に分けた C さんが、他者から罰を受ける場合と、お菓子を公平に分けた D さんが他者から罰を受ける場合。

**予測** 状況 1 での注視時間の比較は、Sloane らの実験と同様であり、乳幼児が公平感を持っているか否かを調べるために行う。乳幼児が公平感を持っている場合は、公平に分配された状況よりも、不公平に分配された状況の方を長く注視するだろう。逆に、乳幼児が公平感を持っていない場合は、2 つの状況における注視時間の長さは変わらないであろう。

状況2については、仮に乳幼児が不公平分配をした者は罰を受けるべきだという信念を持っていた場合、公平に分けたDさんが罰を受けた状況は、乳幼児の予測に反する状況であるため、Cさんが罰を受けた状況よりも長く注視するであろう。逆に、乳幼児が罰傾向に関する信念を持っていない場合は、2つの状況における注視時間の長さは変わらないであろう。

## 現在の進捗状況

現在は、「方法」で示した複数の状況を示した動画を作成し、予備実験として何例か乳幼児を対象に実験を実施した段階である。今後、予備実験の結果を元に動画の修正を行い、20名のデータを得る予定である。

## 引用文献

Fehr E, & Fischbacher U. (2003). The nature of human altruism. *Nature*, 425(6960), 785-91

Gintis H, Bowles S, Boyd R, Fehr E. (2003). Explaining altruistic behavior in humans. *Evolution and Human Behavior*, 24, 153-172.

Sloane S, Baillargeon R, Premack D. (2012). Do infants have a sense of fairness? *Psychological Science*, 23(2), 196-204.

